

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04308

研究課題名(和文)文化に固有の対人認知の生起メカニズム：自発的特性推論の日米比較による検討

研究課題名(英文) Mechanisms of culture-specific person perception: Japan-US comparison of spontaneous trait inferences

研究代表者

清水 由紀 (Shimzu, Yuki)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30377006

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、他者の行動から意図せず自動的に生じる自発的推論に関して、自発的特性推論と自発的状況の同時生起における文化差のメカニズムを探求することを目的とした。特に、分析的・包括的な注意スタイルが、文化と自発的推論の間を媒介しているかどうかについて検討した。2つの実験の結果、ヨーロッパ系アメリカ人は自発的特性推論の方が自発的状況推論よりも多く生じたが、アジア系アメリカ人と日本人では2つの推論は同程度生起することが示された。さらには、注意と自発的推論の関連を調べた結果、行動観察時の注意過程における文化差が、文化と自発的特性推論と自発的状況の同時生起を媒介していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

例えばお年寄りが階段を上るのを手伝っている人を見た時、その人は「親切な人だ」と思う。人にはこのように、他者の行動から意図せず自動的にその人の特性を推論する傾向がある。この過程は自動的に起こるため、制御するのが難しい。特定の人種や性別に対するステレオタイプも、このような自発的特性推論が関わると考えられ、本研究はそのプロセスの解明に寄与しう。また、自発的特性推論に文化差があること、その文化差は他者を観察した時点でどこに注目するかということにより生み出されることを示した。このような成果は、現代のグローバル化社会において、多様な文化的背景を持つ他者を理解することの一助となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to explore mediational mechanisms underlying the cross-cultural variations in the co-occurrence of spontaneous trait and situation inferences. Specifically, we investigated whether an analytic-holistic attention style mediates the relationship between culture and spontaneous inferences. The results of two experiments suggest that European Americans showed more spontaneous trait inferences than situation inferences, while Asian Americans and Japanese showed these inferences equally. Further, the investigation of the association between attention and spontaneous inferences revealed that cultural difference in attention allocation while observing behavioral scenes mediates between culture and the co-occurrence of spontaneous trait and situation inferences.

研究分野：発達心理学, 文化心理学

キーワード：対人認知 文化 自発的推論 特性推論 状況推論 自動的過程

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

我々は、他者の行動を見た時に、その人物のパーソナリティ特性や行動の生じた状況について瞬時に推論する。このような推論はしばしば意図や意識なしに生じ、自発的特性推論 (Spontaneous Trait Inference: STI) および自発的状況推論 (Spontaneous Situation Inference: SSI) と呼ばれる。STI と SSI は同時生起しうることが報告されている(e.g., Ham & Vonk, 2003)。

文化心理学では、北米と東アジアの人々の自他のとらえ方にはシステムティックな違いがあることが示唆されてきた(e.g., Markus & Kitayama, 1991)。例えば北米の人々は分析的な(analytic)思考体系を持つ傾向があり、背景よりも中心物に焦点化した注意配分を行い、他者の行動を人物の内面に帰属しやすい。一方東アジアの人々は、包括的な(holistic)思考体系を持つ傾向があり、中心物だけでなく背景にも注意を向け、行動の原因として状況も考慮する。

これまで、このような思考や認知の文化差と対応して、北米人は日本人よりも STI の生起の程度が大きくより自動的であること(Shimizu, Lee, & Uleman, 2017)、北米人は STI の方が SSI よりも生起が大きいのにに対し、日本人ではこれらが同程度起きること(Lee, Shimizu, Masuda, & Uleman, 2017) などが示されている。しかしこれらの文化差が、どのようなメカニズムで生じるのかについては明らかではない。

### 2. 研究の目的

本研究では、人々が行う自動的な対人認知の文化差を生み出すメカニズムを解明することを目的とした。特に STI と SSI の同時生起における文化差のメカニズムを検討するため、2つの実験を行い、注意過程の違いが自発的推論の文化差に寄与している可能性について調べた。実験1では Analysis-Holism Scale (Choi, Koo, & Jong An, 2007)によって測定された注意の文化差が自発的推論と関連するののかについて検討した。実験2では、行動観察時の人物と状況への視覚的注意が自発的推論と関連するののかについて検討した。すなわち、STI 研究において従来用いられてきた潜在記憶課題への反応に加えて、行動観察時の注視行動を分析することにより、STI と SSI の生起プロセスにおける文化差をより詳細に検討した。

### 3. 研究の方法

(1) 参加者：実験1では、日本人60名、ヨーロッパ系アメリカ人60名、アジア系アメリカ人60名の計180名が参加した。実験2では、日本人72名、ヨーロッパ系アメリカ人74名、アジア系アメリカ人72名の計218名が参加した。

(2) 材料：予備調査により、特性と状況のいずれも暗示している行動文(e.g., 「彼女は簡単にフェンスを飛び越えた」: 「運動神経がいい(特性)」と「低い(状況)」を暗示)を40文、選定した。英語バージョンと日本語バージョンを作成した。

(3) 手続き：PCを用いて個別に実施した。潜在記憶課題として誤再認パラダイムを用いた。実験1・2の共通の手続きは次のとおりである。①接触課題；計60試行。特性・状況暗示文を人物と状況の写真各1枚と共に提示した(アメリカ人バージョンはFig.1参照)。実験2では各参加者の各スライドへの注視をアイトラッカー(Tobii Pro X3-120)で測定した。②フィルター課題；アナグラム課題を5分間解いてもらった。③再認課題；人物の写真と特性語または状況語をペアで提示した。人物写真は接触課題と対応しており、参加者は同じ写真と一緒に提示されていた文の中に、ペアとなっている単語があったかどうかを判断するように求められた。接触課題で特性・状況暗示文を見た時点で自発的推論が生じていれば、その単語が「あった」と誤再認すると想定される。試行の半数は特性語が、半数は状況語が提示された。またそれぞれ半数は接触課題で暗示されていた語が(実験試行)、半数は無関連語が提示された(統制試行)。実験1では最後に24項目の Analysis-Holism Scale に回答してもらった。言語はいずれも参加者の母語を用いて行った。



Fig.1 接触課題における刺激の例

#### 4. 研究成果

(1) STI と SSI の同時生起における文化差：実験 1・2 のいずれにおいても、3つの群いずれにおいても STI と SSI が同時生起したことが確認された。また、相対的な生起の大きさには文化差が見られ、ヨーロッパ系アメリカ人は STI の方が SSI よりもその生起が大きいが、アジア系アメリカ人および日本人においては STI と SSI が同程度生起することが示された (Fig. 2)。

(2) 注意過程の文化差：実験 1 の質問紙の分析結果から、日本人はヨーロッパ系アメリカ人およびアジア系アメリカ人よりも包括的であることが示唆された。また実験 2 において、どのグループの参加者も状況の写真よりも人の写真により多くの注意を向けるが、人と状況の写真への中止時間の差は、ヨーロッパ系アメリカ人が他の 2 群よりも大きいことが示された。すなわち、ヨーロッパ系アメリカ人はより人に注意を向けやすいことが示唆された (Fig. 3)。

(3) 注意過程と自発的推論の関連：実験 1 の結果から、自己報告の尺度によって測定された分析的-包括的思考様式の違いは、STI や SSI の生起とは関連が見られないことが示された。しかし実験 2 の結果から、行動観察時の注意の向け方が、自発的特性推論と関連することが示唆された。具体的には、行動観察時に状況よりも人物により注意を向ける人は、SSI よりも STI をより強く生起することが示された。さらには、媒介分析(mediation analysis)の結果から、注意における違いが、文化と自発的特性推論の間を媒介していることが示唆された (Fig. 4)。

これらの結果から、自発的推論の文化差が生起するメカニズムについて、次のようなものが想定される。まず、文化心理学で示されてきた通り、人は他者の行動に接した時点でどの情報に注意を向けやすいかという時点で、体系的な文化差が見られる。その注意過程が、行動をどのような要素とともに記憶しやすいかという過程に影響を与える。そのような記憶の違いが、瞬時の自動的な自発的推論、すなわち行動から他者の特性を即座に推論するという過程に影響を及ぼす。

なお自己報告による尺度は、今回のような自動的な自発的推論の個人差を予測することができなかった。このことは、文化というのは自動的な認知過程に埋め込まれており、自己報告によってはその過程が取り出しにくいことを示唆している。今後は、脳活動などの、自動的で無意識な過程を測定できる方法を用いることで、自発的推論の文化差のメカニズムについてその詳細を明らかにできると考えられる。

#### (引用文献)

- Choi, I., Koo, M., & Jong An, C. (2007). Individual differences in analytic versus holistic thinking. *Personality & Social Psychology Bulletin, 33*(5), 691-705.  
<https://doi.org/10.1177/0146167206298568>
- Ham, J., & Vonk, R. (2003). Smart and easy: Co-occurring activation of spontaneous trait inferences and spontaneous situational inferences. *Journal of Experimental Social Psychology, 39*, 434-447.
- Lee, H., Shimizu, Y., Masuda, T., & Uleman, J. S. (2017). Cultural Differences in Spontaneous Trait and Situation Inferences. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 48*, 627-643.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review, 98*, 224-253.
- Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). Culture and systems of thought: Holistic versus analytic cognition. *Psychological Review, 108*, 291-310.
- Shimizu, Y., Lee, H., & Uleman, J. S. (2017). Culture as automatic processes for making meaning: Spontaneous trait inferences. *Journal of Experimental Social Psychology, 69*, 79-85.

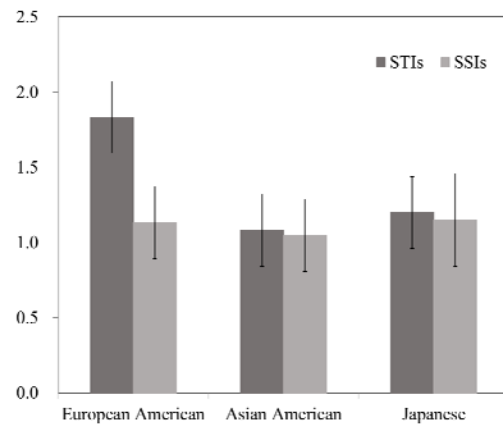


Fig.2 STI と SSI の生起

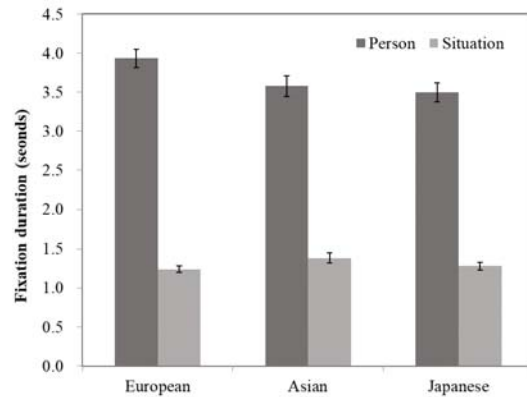


Fig.3 行動観察時における人物と状況への注視時間

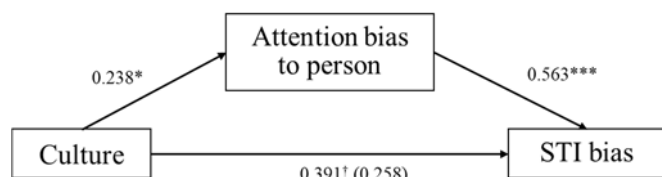


Fig.4 媒介分析の結果

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 9件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Senzaki Sawa, Shimizu Yuki	4. 巻 51
2. 論文標題 Early Learning Environments for the Development of Attention: Maternal Narratives in the United States and Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Cross-Cultural Psychology	6. 最初と最後の頁 187 ~ 202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.1177/0022022120910804	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Senzaki Sawa, Lanter Jennifer, Shimizu Yuki	4. 巻 52
2. 論文標題 The development of attention to singular vs. plural sets in preschool children: Insights from a cross-linguistic comparison between English and Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cognitive Development	6. 最初と最後の頁 100810 ~ 100810
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.1016/j.cogdev.2019.100810	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Senzaki Sawa, Wiebe Sandra A., Masuda Takahiko, Shimizu Yuki	4. 巻 48
2. 論文標題 A cross-cultural examination of selective attention in Canada and Japan: The role of social context	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Cognitive Development	6. 最初と最後の頁 32 ~ 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi.org/10.1016/j.cogdev.2018.06.005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Shimizu Yuki, Senzaki Sawa, Uleman James S.	4. 巻 23
2. 論文標題 The Influence of Maternal Socialization on Infants' Social Evaluation in Two Cultures	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Infancy	6. 最初と最後の頁 748 ~ 766
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi:10.1111/inf.12240	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 清水由紀	4. 巻 73
2. 論文標題 子どもの人生で「信頼感」が育まれていく過程	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水由紀	4. 巻 9
2. 論文標題 コミュニケーションの中で育つ言葉	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 幼児教育じほう	6. 最初と最後の頁 12-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Lee Hajin, Shimizu Yuki, Masuda Takahiko, Uleman James S.	4. 巻 48
2. 論文標題 Cultural Differences in Spontaneous Trait and Situation Inferences	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Cross-Cultural Psychology	6. 最初と最後の頁 627 ~ 643
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0022022117699279	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shimizu Yuki	4. 巻 20
2. 論文標題 Why are negative behaviours likely to be immediately invoked traits? The effects of valence and frequency on spontaneous trait inferences	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Asian Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 201 ~ 210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ajsp.12183	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Lee Hajin, Nand Kristina, Shimizu Yuki, Takada Akira, Kodama Miki, Masuda Takahiko	4. 巻 5
2. 論文標題 Culture and emotion perception: comparing Canadian and Japanese children's and parents' context sensitivity	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Culture and Brain	6. 最初と最後の頁 91 ~ 104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s40167-017-0052-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Uleman James S., Granot Yael, Shimizu Yuki	4. 巻 41
2. 論文標題 Responsibility: Cognitive fragments and collaborative coherence?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Behavioral and Brain Sciences	6. 最初と最後の頁 E60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S0140525X17000814	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Shimizu Yuki, Senzaki Sawa, Uleman James S.	4. 巻 23
2. 論文標題 The Influence of Maternal Socialization on Infants' Social Evaluation in Two Cultures	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Infancy	6. 最初と最後の頁 748-766
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/inf.12240	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 清水由紀	4. 巻 71
2. 論文標題 相手を思いやる心の発達	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水由紀	4. 巻 72
2. 論文標題 発達段階からみたいじめ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 清水由紀・先崎沙和・Jason Cowell
2. 発表標題 幼児の道徳的推論における文化間の類似性と差異 - アイトラッキングによる注意過程の日米比較 -
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shimizu, Y. & Uleman, J. S.
2. 発表標題 Cross-cultural differences in spontaneous trait and situation inferences: An eye-tracking study.
3. 学会等名 31st APS (Association for Psychological Science) Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kitada, S. & Shimizu, Y.
2. 発表標題 Young children's selective attention to babies: Eye-tracking study in Japanese nurseries
3. 学会等名 25th Biennial ISSBD (International Society for the Study of Behavioural Development) Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水由紀
2. 発表標題 道徳判断の発達と文化：日米の乳幼児を対象とした注意過程・言語報告の比較
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北田沙也加・清水由紀
2. 発表標題 幼児期における乳児への関心と養育的行動との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 清水由紀 & James S. Uleman
2. 発表標題 行動観察時における人物と状況への注意の文化差 - アイトラッキングによる自発的推論のプロセスの検討 -
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 北田沙也加・清水由紀
2. 発表標題 幼児の乳児選好が乳児への養育的行動に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年



1 . 発表者名 Shimizu, Y., Senzaki, S., & Uleman, J. S.
2 . 発表標題 Spontaneous impressions: Cultural, automatic, and developmental effects.
3 . 学会等名 19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Shimizu, Y.
2 . 発表標題 Culture as automatic processes for making meaning: spontaneous trait inferences
3 . 学会等名 19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Senzaki, S. & Shimizu, Y.
2 . 発表標題 Longitudinal effect of parental values of self-concepts on an early emergence of cross-cultural differences in personality development
3 . 学会等名 19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Shimizu, Y. & Senzaki, S.
2 . 発表標題 The role of culture in infants' social attributions and mothers' social explanations
3 . 学会等名 Biennial Meeting of Society for Research in Child Development ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤村 宣之, 旦直子, 常田美穂, 郷式徹, 小松孝至, 清水由紀, 天谷祐子, 加藤弘通, 松岡弥玲, 伊波和恵, 神原知美, 藤田豊	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 274
3. 書名 発達心理学 [第2版]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----